

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

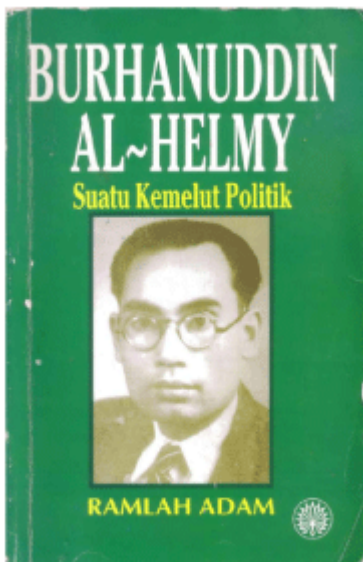
幻の「大マレー」「大インドネシア」構想

左右田直規（東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授）

古来、人やモノが盛んに往来してきた多島海に位置するマレーシアとインドネシア。両国はルンダンやサテなどの料理、パティックやクバヤなどの衣服、ワヤン・クリなどの芸能をはじめ、豊かな文化資源を共有している。近い間柄にあるだけに摩擦が生じることもある。文化遺産の本家争い、移民労働者問題、領海問題など対立の火種は少なくない。

皆さんはご存じだろうか。この両国を含むマレー・インドネシア世界の統一を目指す構想がかつて提唱されたことを。「大マレー（ムラユ・ラヤ）」や「大インドネシア（インドネシア・ラヤ）」と呼ばれる構想がそれである。

日本占領期に国家構想として浮上



「大マレー」論者のひとりブルハヌッディン・アル・ヘルミ

マレー・インドネシア世界の団結を唱える思想は第2次大戦以前からあった。それが国家構想として現実味を帯びたのは日本占領期である。1944年9月に小磯首相が東インド（インドネシア）の将来の独立許容を表明、1945年3月に発表された独立準備調査会にはスカルノやハッタラ現地指導者が加わった。7月、同調査会はインドネシアの領域を議題とし、スカルノを含む過半数の委員が、

旧蘭領東インドに旧英領マラヤ・ボルネオ、ニューギニア、ティモールを加えた領域からなる「大インドネシア」の案を支持したのである。

同じころ、マラヤでは、戦局悪化の中で現地の人心を掌握するために日本軍がマレー民族運動を積極的に支援する方針に転換した。1945年5月、日本軍公認のマレー民族運動「クリス」の準備が始まった。その中心メンバーには、イブラヒム・ハジ・ヤーコブやブルハヌッディン・アル・ヘルミら「大マレー」を志向する左派の青年マレー連盟の元会員が多く含まれていた。彼らは上述の「大インドネシア」案に期待した。

短命に終わった国家構想

しかし、「大インドネシア」構想は短命に終わった。1945

年8月にスカルノやハッタラの代表団はベトナムで寺内元帥と会談し、独立が認められる領域は旧蘭領東インドだとする日本の方針に従った。終戦直後の8月17日、スカルノらはインドネシアの独立を宣言したが、その領域は旧蘭領東インドのみであり、「大インドネシア」ではなかった。

他方、マラヤのクリスは終戦によって日本軍の支援を失い、8月17、18日に予定されていた設立大会を目前に解体した。早期独立とインドネシアとの統合を望む指導者たちと、そうでない指導者たちとの間の見解の相違も露呈した。イブラヒムはインドネシアに渡ってスカルノにマラヤとインドネシアの統合を訴えたが、スカルノは旧蘭領東インド地域の独立達成を最優先する姿勢を守った。「大インドネシア」構想は棚上げされたのである。

構想の再浮上と終焉

マレー・インドネシア世界の政治的再編が再び議論されたのは1960年代のことである。1961年5月にマラヤ連邦首相のトゥンク・アブドゥル・ラーマンがマラヤ、シンガポール、サバ、サラワク、ブルネイを統合する「マレーシア」構想を表明した。野党指導者のブルハヌッディンとアフマド・プスタマムは、旧英領地域のみからなるマレーシアに反対し、インドネシアとフィリピンも含む「大マレー」の形成を主張したが、ラーマン政権によって危険分子とみなされ、ついに1963年に逮捕された。

国外では、マレーシアをイギリスの新植民地主義の所産だと非難するインドネシアや、サバの領有権を主張するフィリピンが、マレーシアと対立した。しかし、1965年にインドネシアでスカルノが失脚、フィリピンでも政権交代が起こり、両国とマレーシアとの関係は正常化に向かった。

こうして「大マレー」「大インドネシア」構想は政治の表舞台から姿を消した。姿を消すにはそれなりの理由があった。とはいえ、以下のことは記憶されてよいだろう。それは、脱植民地化の過程で、マレーシアやインドネシアといった国家が、「大マレー」「大インドネシア」などの別の構想と競い合うなかで形成されてきた、ということである。

< 筆者紹介 >

1969年、京都府生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程中退。博士（地域研究）。専門は、マレーシア政治社会史を中心とする東南アジア近現代史。主な研究対象は、英領マラヤにおけるマレー民族意識の形成史、ならびに現代マレーシアの社会変容と政治である。共著書に『民主化とナショナリズムの現地点』（玉田芳史・木村幹編、ミネルヴァ書房）、『マハティール政権下のマレーシア』（鳥居高編、アジア経済研究所）など。